

# ろう児の言語獲得について

## - 医学的視点から -



なかがわ たかし

中川尚志

九州大学大学院医学研究院 耳鼻咽喉科学分野 教授

一般社団法人 日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会 理事



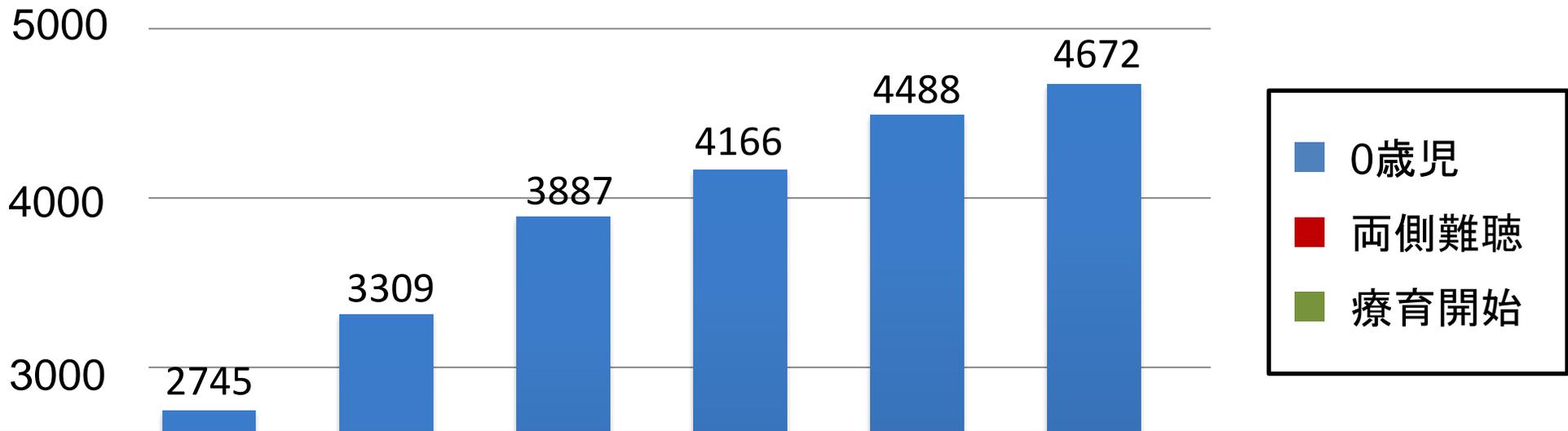
一般社団法人 日本耳鼻咽喉科学会  
The Oto-Rhino-Laryngological Society of Japan



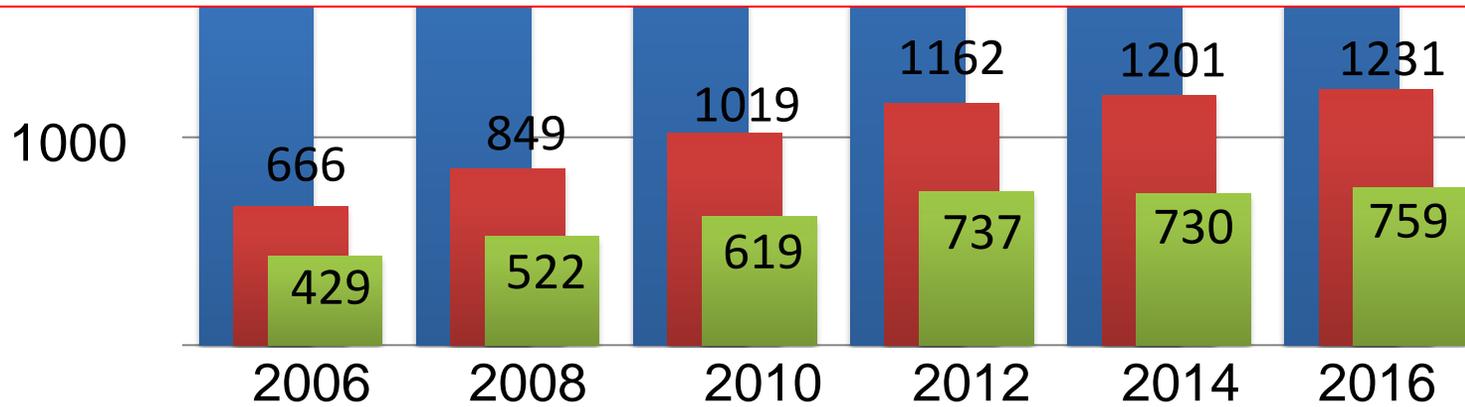
九州大学  
KYUSHU UNIVERSITY

# 新生児聴覚スクリーニング後の精密聴力検査機関実態調査

## 調査年度別の初診0歳児数/両側難聴/療育開始児数



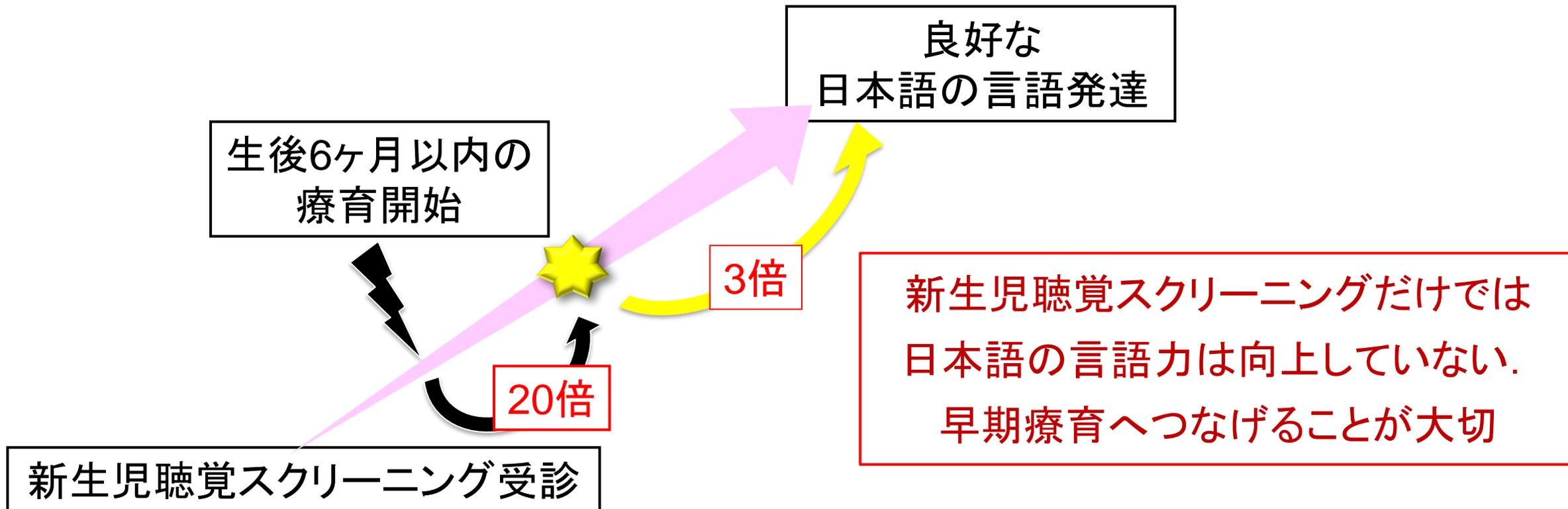
新生児聴覚スクリーニングで0歳児で見つかるきこえないこどもたちの数が増加  
最近10年で約2倍





厚労省戦略研究

両耳とも70dB以上の難聴があるこどもたちを対象に行われた日本語の言語発達を評価推定では対象児童全体の4人に1人が参加した大規模研究

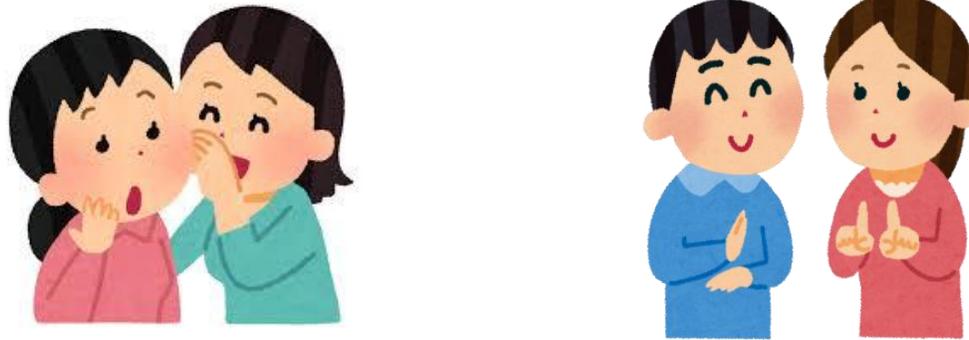


赤ちゃんが口にする喃語の時期や言語の力を獲得する上限の年齢とされる

臨界期があることを含めて、

音声言語の獲得過程と手話言語の獲得過程とはそう変わらない（武居 2005）

早期診断・早期療育は新生児に二つの言語を習得する可能性を提供する（大杉 2012）



早期診断・早期療育は手話言語においても良好な言語発達を育む

## 手話言語話者である先天性ろう者と音声言語話者である聴者の脳の比較

- ✓ 一次聴覚野での神経細胞の連絡は減少
- ✓ 異なった感覚である聴覚と視覚との統合に関係する島回は体積増加, 機能亢進
- ✓ 一次聴覚野と視覚野との神経連絡が増加, 機能亢進

(Hribar M et al. NeuroImage 2020)

- 手話言語話者である先天性難聴のろう者の脳では異なった感覚である聴覚と視覚の間の神経連絡および機能が, 音声言語話者である聴者に比べて, 強化されている.
- 手話言語を使える聴者, 手話の習得が遅いろう者は聴覚と視覚の機能連携が弱い

## 手話言語話者である先天性ろう者と音声言語話者である聴者の脳の比較

- ✓ 手話言語話者である先天性難聴のろう者では、異なった感覚である視覚と聴覚とが神経細胞レベルおよび機能的に強く結びついている。
- ✓ 手話言語話者である先天性難聴のろう者では、視覚情報が聴覚野に入力され、聴覚に関係する一次聴覚野周囲の大脳皮質で認知、処理されている。手話は視覚と聴覚のクロスモダリティで言語として理解されている。
- ✓ 手話言語の獲得が早いほど、視覚と聴覚のクロスモダリティの確立が良好である。早期発見・早期療育が手話言語の獲得にも有効であることを裏付けている。

(MacSweeney M et al. Trends in Cognitive Science 2008; Hribar M et al. NeuroImage 2020)

# コミュニケーションを基盤にした言語の獲得

## 乳児期

情動的関係: こどもの情動へ働きかけ, 両親などの養育者と共鳴・一体化し, 愛着形成に基づいて言語獲得のきっかけを作る.

交話的關係: 模倣や手指表現, パターン発声など言語へ移行していく.

## 幼児期から臨界期に向けて

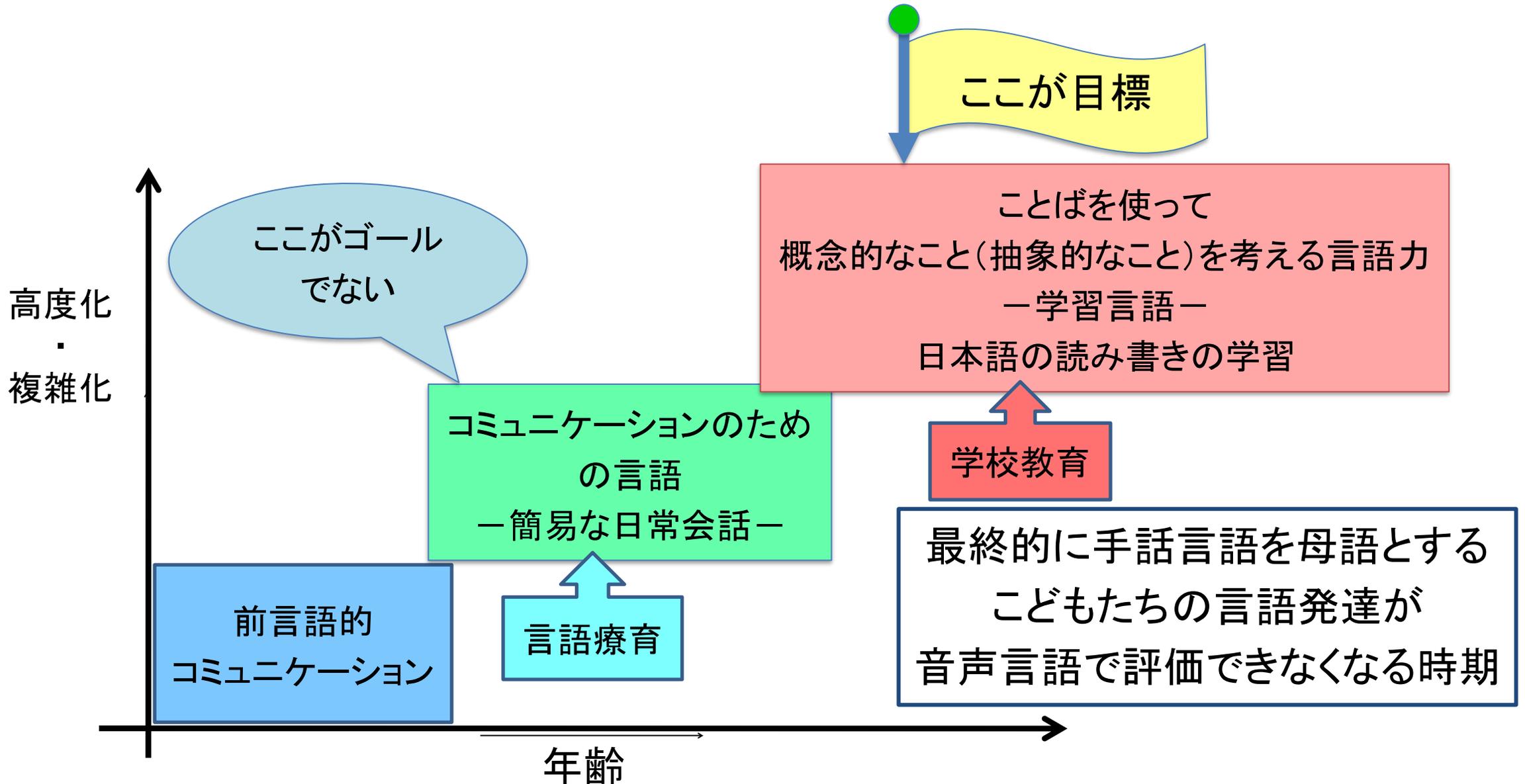
相互伝達的關係: コミュニケーションモードが形成されていく. 音声言語であれば, 明瞭な発話の獲得の臨界期がある.

## コミュニケーション言語の獲得

療育法によっては, 手話言語と音声言語とが混在しているが, 母語形成の時期.

(中村公枝: 小児の指導・訓練, 藤田郁代監修; 聴覚障害学, 医学書院 2010)

# コミュニケーションのための言語から学習言語へ



聞こえにくい子どもたちの成長に関わっていると  
言語力のみに囚われるべきでないことを学びます。



聴覚補償と聴覚管理だけでは  
上手くいっているとみえても支援が不十分  
何が必要？

セルフアドボカシー

# セルフアドボカシーとは？

障害のある当事者が必要なサポートを獲得するために自分で声を上げて  
周囲と交渉，同意に至る

障害者の義務と権利を熟知，自身の障害を説明，社会的資源を利用

聞こえないことの認識：音の存在を理解．騒音や距離の問題を認識．

聞こえるために必要なことの認識：

補装具の基本的な知識．補聴支援機器の知識．

聞こえればできることの認識：得意なことの確認．自信と自尊心．

社会の制度についての認識：

社会システムとその成り立ち．基本的人権・法律について

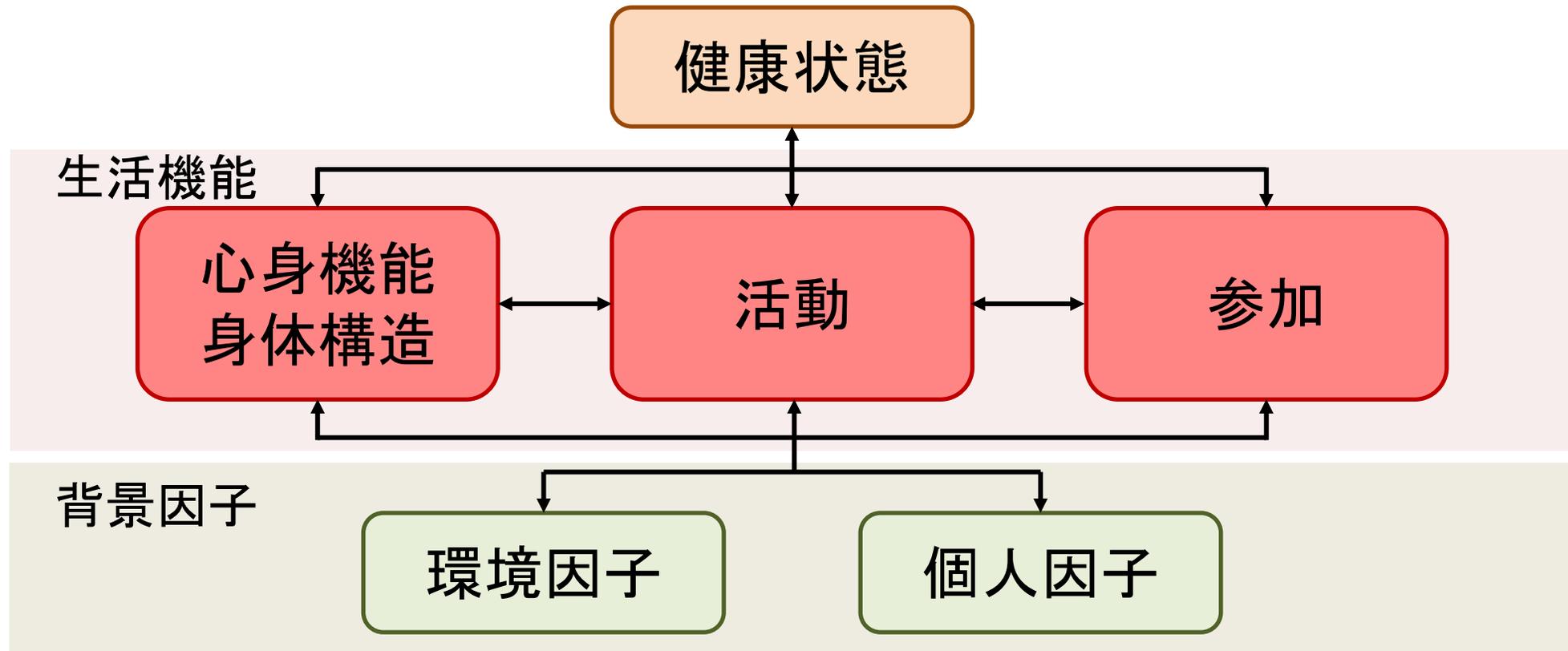
# 聞こえにくいこどもたちの自立に向けた 国際生活機能分類からみた聴覚障がい

インクルージョン  
-“共生”の社会を作る-



# 「自立」を最終目標とした支援への社会の理解

2001年5月に国際生活機能分類(ICF: International Classification of Functioning, Disability and Health)が、WHOで採択された。それまで使用されてきた国際障害分類(1980年採択)は「疾病の結果に基づく分類」であったのに対し、国際生活機能分類は、社会モデルに基づき、生きることの全体像を示す「生活機能モデル」を示した。



# 聞こえにくい子どもたちの自立にはその後の支援が必要・不可欠

難聴の診断・医療的評価・介入  
補聴器・人工内耳・手話言語

言語療育・難聴児教育で  
コミュニケーション能力  
読み書き力を育てる

就学支援・就労支援  
就労継続支援(ジョブコーチ)  
地域社会への参加

生活機能

聞こえにくい

言語力低下  
コミュニケーション

就学・就労  
社会活動の制限

背景因子

環境因子

個人因子

自治体の福祉制度  
マクロレベルでの経済状態  
情報保障のテクノロジーの発達

セルフアドボカシー  
家庭構成・経済状況  
本人自身の特性への対応

## 「自立」を最終目標とした支援への社会の理解



聞こえにくいこどもたちに関わるとき、最も大切な点は自立を最終目標に据えて、本人および養育者と心情を共有し、本人が周囲の環境へ俯瞰する力をつけ、自尊心を育てることです。それには...養育者支援, 療育・教育体制, 聞こえにくいことで不利益を被らない社会をひとつひとつ整えていかなくてはなりません！